



横浜陶芸友の会だより

第 190 号

令和 6 年

8 月 15 日発行

「今年もあれこれ」

横浜陶芸友の会会長 鍋島 弘義

令和 6 年 7 月 27 日 (土) に杉田地区センターにおいて「役員会」が行われました。話し合いが早く終了したので会場の写真機器を使用して 24 年前に「窯場見学会」の下見で行った益子の 8mm ビデオを見ました。これは見学会本番で先生の紹介や作品を前もって見ていた



多く目的で記録したものでした。今となってはとても貴重な物になりました。ご覧になりたい方は USB か SD カードを持ってきていただければダビングできます。私が高橋光男さんに声をかけてください。

今年もまた、関東学院大学から展示の依頼の連絡がありました。

昨年、どちらも手探りで展示会でしたので見学に来られる方も少なく、見ごたえのある展示だっただけに、少々気落ちした感がありました。今年、もう少し宣伝しながら内容も充実できれば良いと思っています。

会員の皆様、今まで作陶された自慢の逸品を是非展示してみましよう。お友達にも声をかけていただき盛り上げていきましょう。会報では間に合わないので会員間のラインやメールを通じて詳細は連絡していきます。よろしくご協力お願いいたします。

また一つ絆(きずな)が出来ました。HP を通じて「保土谷小学校」の 3 年生から「総合学習」の時間に陶芸の事について、教えてほしいとの依頼がありました。電話では内容がよくわからないので学校に伺ってお話を聞き窯を見せていただきました。窯はほとんど使われていなくて釉薬も袋のままの状態で置いてありました。

担任の先生もインターネットで色々窯の使い方や作陶について勉強されていました。何より心動かされたのは『帷子川で取れる粘土を使い「保土谷の地場産の陶芸作品」を作りたい』すでに、土木事務所には相談している。と先生も生徒も張り切っていることでした。これは応援するしかない。と、7 月に outcomes 「葉皿」を作ってきました。次回は 9 月に行く予定です。楽しみです。

「役員会」報告

7 月 27 日 (土) 15 時より、会長、副会長、各役員 9 名の出席で話し合いました。

《 議題 》

一、各部からの報告

①総務部

○昨年、初めて参加した「関東学院大学」の「関キャンフェス」に今年も参加についての案内が来ました。詳細は、まだ出ていませんが、会として「展示参加」の方向で進めていく予定です。

〔日程〕 11月2日(土)、3日(日)

○会計より

・今年度の「総会」で会則の変更がありました。が、「会計部」という名称が残っていました。再度、この箇所について来年度の「総会」で訂正したいと思えます。

○広報より

・8 月上旬に会報の第 190 号を発行する予定。
・次回は 11 月中旬に会報を発行する予定。
・作品展で「陶陶さん」特集を企画する予定。

○その他

・横浜市市民利用施設予約システムの利用者登録の連絡者の変更をいたします。

② 専修部より

前回の「友の会だより」でご案内したように、左記日程で秋期焼成会を行います。

記

○ 9月29日 (日) AM 10時 受付

○ 10月6日 (日) AM 10時 釉掛け

○ 「作品引渡し」については参加重量により受付時にご案内いたします。

○ 「焼成費」は 1000円 / 1kg

※受付時 素焼き済み作品を持参した方は希望により 当日釉掛けも可能です。

※(その場合は 6日に来る必要はありません。)

※木の葉天目焼成希望者は、天目にて焼成済み作品を、ご持参ください。

木の葉は専修部で用意しますが木の葉を押える陶片をご用意してください。

※基本的には酸化焼成です。

※釉薬は「友の会だより」2月号掲載の25種類あります。

〈受付会場・問い合わせ先〉

郵送された会報をご確認ください。

会場までの地図

郵送された会報をご確認ください。

今回も会場が**技能文化会館ではありません**ので、ご注意ください。

③ 事業部より

「作品展」の日程が決まりました。

・「第45回作品展」について

〈会場〉かなつくホール3階ギャラリア

〈会期〉令和7年1月14日(火)〜19日(日)

〈出展料〉令和6年同様(45cm) 2000円

〈特設コーナー課題〉「角皿」大きさは自由

〈その他〉

・感染症対策については、かなつくホールの方針を遵守する。

・作品展の詳細については10月の役員会で報告し11月の会報に同封する。

二、その他

・HPを通じて「保土谷小学校」の3年生から「総合学習」の時間に陶芸の事について、教えてほしいとの依頼があり、7月2日に行ってきました。

帷子川で取れる粘土を使い「保土谷の陶芸作品」を作りたいと張り切っていました。

三、次回の「役員会」予定

☆ 10月27日(日) 15時から



「泥彩百葉文皿」 粘土：黒泥 葉文：白化粧にコバルトを混入・背景はマンガン泥
 1. 素焼き後化粧土刷毛塗り 2. 2度目の素焼き後、葉文をマスキングして背景を泥彩
 3. 3度目の素焼き後、透明釉ガン吹きして本焼き

- ① 一回目成形をしたら素焼きをする。
 ・その後、青い化粧土を塗る。
- ② 次に二回目の素焼きをして、マスキングをする。二回目の素焼きをしないと化粧土の上にはマスキングが貼れない。
 ・貼り終わったら背景の黒い泥漿を塗る。
 ・マスキングは、ラベルシートに若葉の型を書き葉の真ん中の筋はカッターで 1.5mm 幅に切る。6.4cm の中に角々を 4 枚の葉っぱで抑える。周りは 2mm 間隔で線を引く。
 ・青いムラのグラデーシオンはローラーで濃さを変えた青の化粧土を塗っている。
 ・一枚だけ色が黒いのはクロムで温度を上げたからかもしれない。後のはコバルトだけ。
 ・コバルトの化粧土は素焼き温度を少し高めの 850℃。二回目の素焼きのクロムの方は 750℃にすると水道の水で洗った時に上が綺麗にはがれやすい。
- ③ 三度目の素焼き後、透明釉ガン吹きして本焼きをする。
 ・シールが焼けてはつきり残るので、それで、この皿を作ろうと思った。



「織部茶碗」 粘土：古陶黄瀬戸 織部釉薬
 サヤに入れ蓋をして強還元で焼成



「織部茶碗」 粘土：古陶黄瀬戸 織部釉薬

「織部茶碗」 同じ粘土：古陶黄瀬戸 同じ織部釉薬 を使って酸化と還元で焼いた物。
 赤い方で土が茶色くなったのは、サヤに藁を入れ蓋をして強還元で焼成したもの。土が真白いのは古陶黄瀬戸粘土で黄瀬戸用の粘土。同じ土・釉薬でこれだけ違いが出る。藁でなく炭で焼いても違うかもしれない。
 織部が黒っぽいのは焼き過ぎてるのかもしれない。これは 1240℃で下の方で焼いたもの。
 低温の方が黒くならないかもしれない。



「モンステラ文皿」 赤信楽土 黒マット釉 酸化
「モンステラ」という植物の葉の本物で型を取り作った作品。



今回の出展作品

「第44回作品展の作品」
吉村希世子

「練込みバラ文小皿」について
土は何でもよいが、割合磁器土を使う。
これは半磁器土ですが信楽でもよい。
同じピンクでもグラデーションにして、白と薄い色を順番に巻いていき、金太郎飴のようにスライスして貼り合わせていく。
接着面がピッタリしていないとうまくつく付かない。潰れないように圧着するのが難しい。
結構作ったら寝かしておかないとうまくいかない。丸でも四角でも繋げていけば大きなものもできるけど、接着がうまくいかないかと割れてしまう。接着に使うのはドベでなく、水だけでやります。
とにかくくめんどくさい。手間がかかる。割れることが多い。
昨年の関東学院に出した時は、自分でもこんなに色々な物を作ったかとビックリしちゃった。



「半磁皿(団栗図)」 半磁土 透明釉 酸化
「練込みバラ文小皿(2点)」 信楽土 透明釉 酸化
「器・彩磁」 信楽土 透明釉 酸化



「花器」 信楽まぜ土 トルコ釉 酸化

「半磁皿(団栗図)」
この緑はちよつと濃すぎるけど、彩磁というものです。
生のボディを作って、これに絵を描いて、薄い、緑なら同じ土のドベに1%くらいの緑のクロムかな？を入れた泥を作り、焼かないうちに何度も塗り重ねていく。
普通の絵の具ではなく磁土に色を着けた「彩磁」で葉を描いた作品です。



「三角小皿」 黒泥土 刷毛目・透明釉 酸化



角皿(2枚) 赤信楽土 自然釉 穴窯焼成

植木鉢は割れた失敗作でしたが、破片を拾い、同じ色の接着剤でくっ付けて作っております。



「植木鉢」 混合土 白マット



「第44回作品展の作品」
逢阪博樹



「蛙の混成三部合掌」 白土 織部 他

- ・最初に蛙さんを作ろうと思ってガマガエルを作ったら、リアルすぎてかなり不評でした。それはつぶして捨ててしまいました。
 - ・何かないかと探していたら、たまたま新聞に「蛙の合唱」という石の置物がありました。それをイメージしながら作ってみました。
 - ・作るの簡単で形を作っておいて、耳をちょっと摘み上げ、丸いので唇を出して少しへこましてお腹をちょっと出して。と、というような感じで後は手と足をくっつけただけです。
 - ・体調を壊したから、あんまり没頭する時間も取れないし・・・。
- 蛙のみどり色は、織部を吹いて濃淡を出しました。計算をして吹いているものは一つもありません。



「飯茶碗」(2) 黒御影 黒天目・ワラ灰

- ・陶板は、白い土に彫り込んで透明釉を掛けその上に茶、緑、青のガラスを入れて本焼してあります。
- ・シンプルすぎちゃって、あんまり評判は良くありません。
- ・時間が無かったというのもあってシンプルなものになりました。
- ・掘る道具としては、普通の陶芸の道具です。葉っぱの様な小さい所は耳かきを使っています。
- ・土台が生乾きの時に作業は行いませぬ。乾くと削れなくなってしまうためです。

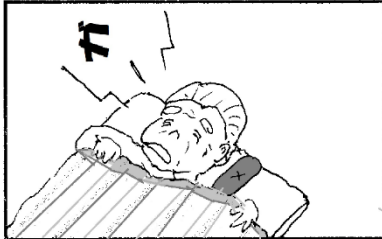


「陶板(ガラス絵)・藤」 白土 色ガラス

陶陶さん

第 112 号

あかほし



片口(自然釉)
古信楽細(沼津穴窯)



歪み猪口で飲み口によるお酒の風味を味わう
「偲ぶ猪口」でいろいろな事を偲びながら



偲ぶ猪口(白化粧)
古信楽細(電気窯焼成)



歪み猪口(5組)(窯変)
古信楽細(沼津穴窯)

「第44回の作品」高橋光男

「今年のねらいは」
お猪口で酒の味が変わる。それをテーマにして4年前沼津の穴窯で焼いた作品を持ってきました。
飲み口が広いのと狭いのと、それによって味が変わる。
広いのは香り。飲むときに空気と一緒に吸い込むので香りがいい。
狭いのはストレートに入ってくるので辛口の酒が美味しいと自分は思っていました。
深いのは香りが溜まるので芳醇な酒、吟醸酒が合う。
抱え込んでいるのは、ここ2、3年仲間が段々他国に行って、たまには酒を入れてほんのちよっと偲びながら、手で抱え込んで温めながら、そういう思いも込めて飲む。
辰砂のような赤は穴窯の場所によってできたものです。
片口は、私好みのたっぷり入る物です。
※写真に撮れなくて紹介出来なかったのですが、猪口の説明用にQRコードが用意されています。
次回試してみてください。

【編集後記】

今年も「作品展」の会場の日程が希望通り取れ「頑張って作品を作らなくては」と思いつつも日中のこの暑さでは、意欲も湧いてこないのが実情です。焼成会に持って行く頃はこの暑さも収まってほしいものですね。
・関東学院大学から今年も声がかかりました。無料で2日間、関内の一等地で個展が開けるつもりで昔の逸品を探しておきましょう。
(私には無いので昨年度と同じにするかな)
・会報に載せる作品展の作品写真が黄色がかった気になっていたので、今回修正を加え多少見易くなったのではないのでしょうか。
・可愛いちびっ子たちが粘土に興味を持ち、将来陶芸家になったらすると嬉しいな。
「作品展」も、見に来てくれると嬉しいな。
将来の夢に満ち溢れた子供たちと接すると、こちらまで元気をもらえます。
本当に、若いつてそれだけでいいな。
鍋島弘義

ホームページもチェック!!

横浜陶芸友の会

検索

<http://www20.atpages.jp/tomonokai/>

横浜陶芸友の会だより
第 190 号

(令和 6 年 8 月 15 日発行)
(発行人) 横浜陶芸友の会
会長 鍋島 弘義